

終りに見た街

山田太一



中公文庫

中公文庫 ©1984

終りに見た街

昭和五十九年五月十日初版
昭和五十九年六月十五日再版

著者 山田 太一

発行者 嶋 中 鵬 二

整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七
振替東京二一三四
ISBN4-12-201120-5

定価 三四〇円

中公文庫

終りに見た街

山田 太一著



中央公論社

表紙・扉 白井晟一

目次

第一章	朝の散歩	7
第二章	災難	22
第三章	旧友再会	51
第四章	逃走まで	66
第五章	適応と反撥	100
第六章	キーキーキー	123
第七章	日本臣民として	143
第八章	決意	158

第九章	九日までの行動	185
第十章	反乱と空襲	220
終章	終りに見た街	230
あとがき		239
解説	今江祥智	243

終りに見た街

第一章 朝の散歩

分譲地は、多摩川を見下ろす高台にあった。

対岸は東京都、手前は川崎市である。のちに思いもかけぬ変貌をとげることになるおよそ三百七十戸からなる住宅地は、六月の朝靄もやの中で静かだった。

私は四十七歳のテレビドラマのライターで、いつものように柴犬のレオを散歩に連れ出していた。坂の多い住宅地の道を、犬は鼻先でたどるようにして歩き、ときおり他所よその犬に吠えたてられて、小走りになった。

家々は、多く南斜面につくられ、多摩川に面した北斜面には少なかった。私の家は、その北斜面におりようとする高台の一番上の端にあった。住宅の位置としては欠点が多く、周囲にくらべて価格も安く、だからこそ私にも買えたというような土地だったが、唯一のとりえは多摩川の眺

望だった。

眼下というわけにはいかなかったが、一キロ足らずの遠くに川が見下ろせ、時間天候季節による水の光の変化を見るのは、ささやかな快樂だった。

更にはるか、新宿の高層ビル群も小さくあり、夜になるとそれら都会の細かな灯りの遠景、二子玉川の高島屋のネオンサイン、鉄橋を渡る田園都市線の電車の灯りの連なりが美しかった。その朝、私は歩きながら旧友を思い出していた。

もう三十年以上も逢っていない友人である。その友人に明日の夜、渋谷で逢うことになっていた。どこにいるかも分らなかった旧友から、一昨日不意に電話があったのである。

「おぼえてますか……宮島です」

聞きおぼえない中年男の声であった。私は短く返事をためらい、それからまったく別人を思い出し、しかし声が違うようなので「宮島さん——」といぶかし気な声を出すと、

「敏夫です。宮島敏夫です」といった。

「あ——敏夫さん？」

私は陽気な声を出した。なつかしさが溢れた。「三十年ぶりぐらいかねえ」というと、「そう。三十年ぶり。正確には三十三年ぶり」と彼の方もなつかしそうな声でいった。

九歳までの親友で、十四歳のとき一度だけ逢い、それから三十三年逢わなかった友であった。

朝の道を歩きながら、その十四歳の時を私は思い出していた。昭和二十三年の六月である。その時は五年ぶりの再会であった。戦争が終って三年がたっていた。何度も手紙をやりとりしたあとで、私が彼の家を訪ねることになったのだった。

交通費を出して貰わなくてはならず、父に許しを求めると、

「持っていくようなもの、なにもないぞ」と父は手みやげのことをいった。

「なんにもいらないってさ」

そんなことはいって来なかったが、逢いたかったので「日帰りだし、ちょっと逢うだけだし」と私は、いかにも軽いことのようにいった。

「そももいかないだろう」

父は前夜、小さなわが家の、棚や押入れに長いこと向っていて、あちこちへこんだ蓋つきの鍋を選び、よく洗って風呂敷に包んでくれた。

「本当は米とかうどん粉がいいんだがな」

私にすまないといういい方ではなく、自分自身に腹を立てているようにそういつて短く吐き出すような溜息をついた。

母を失くし——つまり父にとっては妻を失くし、中学生の私と小学校六年の妹と父は暮していた。仕事は実にいろいろなことをしていた。たとえば指圧療法をやったり、切れた電球を再生さ

せたりしていた。電球の仕事は、私の記憶では、切れた電球をのぞきながら振っていると、フィラメントの切れた個所が再び触れ合う瞬間があり、その時すかさず電流を通すとくつついてしまうというようなものだった。もつとも、そんなことなら、どこの家でもやれるだろうから、もう少し複雑だったのかもしれない。中学生に親の苦勞の細部は分らなかった。

その朝は五時に起きて薩摩芋を二本食べた。

「芋ならいいわけじゃないが、みやげとなりやあ二本や三本でわけにもいかないしな」

父はまだそんなことをいった。

「いいよ。お鍋、喜ぶよ」

私も芋や米は、なるべく人にやりたくなかった。なにより食糧は貴重だった。それに、鍋だつて、何ヶ所かへこんではいたが、戦前のいい頃の鍋だし、長いこと大切に使っていたものだった。「あまり家のことは、しゃべるなよ」

そんなことも父はいった。大きくはなかったが、人を四、五人使って食堂をやっていたのだ。戦争でやめざるを得なくなり、山間の町へ引越して、そのまま暮していた。

「品川の駅は大きいぞ」

「大丈夫」

そんな心配をされるのは、生意気な中学生としては心外であった。

三時間半ほどの旅だ。たしかに一人で東京へ行くのは、はじめてだったけれど、五年前までは東京に住んでいたのだし、品川駅で上り東海道線をおりて池袋駅へ行くにはどうしたらいいかわらないは聞かないでも分っていた。

かつて浅草で隣同士だった旧友の家は、いまは西武線のN駅から十三分ぐらいのところにあるらしかった。

——ぼくが歩くと、おおむね十一分です。母は十四分から十五分かかります。探しながらの初めての人は四十分はかかると祖母はいつています。でも、四十分かったのは祖母の知り合いのおばあさんですから、あまり参考にはなりません。ハハハハ。

旧友は、手紙によく笑い声を入れて来た。一つ年上で、勉強がよく出来てとりわけ数字に敏感だった。彼が十一分で行くところなら、さがしながら自分は十三分で行くだろうというような頭の働かせ方は、彼の影響によるものだった。もっともその影響は、五年逢わないうちに随分薄れていた。

六時台の電車に乗ったがその頃の電車は時間に関係なくいつでもひどく込んでいた。漸く入った真中あたりの通路で、押しつぶされるように立ち続けた。

「そうかい。強制疎開かい」

煙草くさい汚ないような男が、息を吐きかけながら、しつこく私がどこになににに行くかを聞

いた。

「ありゃあひどかったよなあ。警防団や消防が人の家の柱に鋸目のこめを入れて、梁はりや桁けたに綱をつけて、みんなでひっぱって引き倒しちまったんだからなあ」

「はい」

一言も返事をしたくないくらい口が臭かったが、ちょっと怖いようなところもあって、つい相手になった。

「政府が頭っから、どけっっていったんだよなあ」

「はい」

「こっちからこっち、この一画に住んでる奴は家いこわすからどけ、えってなもんだ」

「はい」

過密な町のあちこちに「空地帯」をつくって、空襲を受けた時、延焼を防いだり避難場所にしようという政策だった。指定された一画の人々是否も応もなく、政府の安い買収に応じ、立去らなければならなかった。江戸時代からの家であろうと、漸く築いた店であろうと容赦はなかった。

「ひでエ時代だった」

「はい」

横浜駅へ列車がすべりこむと、男はいきなり私の手の鍋の風呂敷包みをひったくるようにとり

上げ、

「ちょっと貸してみな」と明るくいった。

「は？」

「いいからいいから」

いいながらデッキの方へ行くのだ。

「なんでしょうか？」

「いいからいいから」

「それぼくんです」

「分ってる分ってる」

明るくいいながら無理矢理人を分けてドアへ進む男のあとを、慌てて私は追ひ、誰かの足を踏み「痛エじゃねえか」と背中を思い切り突かれながら、それでも夢中でホームへとび出した。男は、いなくなっていた。ベルが鳴る中を、私はホームを前後に走った。泣くような荒い息で列車が動き出しても諦めきれず、しかし結局はデッキにとび乗った。まだ電動ドアではない時代だった。

敏夫さんの家のあるN駅へは午前十時すぎに着いた。丁寧な地図を貰っていて、目印が次々と地図通りに現われ、左へ曲り右へ曲った。

——空襲で二回家が燃えて、三回引越したのですから、話はいっぱいあります。

敏夫さんはそう書いて来て、私も「ぼくだってそうです」と返事を書いた。浅草の頃から比べたら、なんについても経験は段違いで、自分の成長をやや誇張して話したい思いでいっぱいだった。前にはちよつとぶたれても大きな声で泣いたが、田舎へ来てからは、先生にも地元の連中にも殴られて、それは実は今だに平気ではなかったけれど、敏夫さんには「一番傘で顔バーンてやられてさ、鼻血出したって泣かないよ」などと自慢がしたかった。長いこと、そんな話の出来る相手がいなかった。私は、どんどん急ぎ、畑や草の茂った空地の中の道へ出て、それから分らなくなった。

行きすぎたようなのである。振りかえった。地図を見る。目印の枯れて折れた太い樺の樹がある。

その左。振りかえったから、右。

私は、じわじわと了解した。まさかと思った小さなトタン屋根の、古板をかき集めて打ちつけた汚ない小屋が敏夫さんの家なのだった。そのあたりは、空襲を受けていなくて、点在する家も割合いしかりしていたので、焼跡ならそれほど珍らしくないトタン屋根の小屋が、人の住む家とは思えなかったのである。田舎にいて、そうした小屋を見慣れていないせいもあった。

よく見れば、干し物はなかったが物干しもあり、住居であることはあきらかであった。

あの写真館の、敏夫さんの家——。

かつては入口の左手にショウウィンドーがあり、娘や兵隊や赤ん坊の写真が四、五枚額に入れて飾ってあり、ガラスに、くすんだ金色で「宮島写真館」と書かれたドアをあけると、ひんやりした玄関に花が飾られ、床は焦茶色によく磨かれていてスリッパが置かれ、順番を待つ人は少しバネの緩んだソファに腰掛けるのだった。

左手に写場があり、医院のように受付と書いた小さな窓口があった。おじさんは、鼻の下にいわゆる「チョビ髭」を生やして、甲高い声で「はい坊やちゃん、こちらを御覧遊ばせエ」などといい、ズドンとフラッシュをたいたのだった。

道から小屋まで十五歩ほどあり、近づくとき家の中で小さな物音と人の気配がした。

「こんにちは」

物音が止まった。しかし、返事がない。

「こんにちは」

ちよつと間があつて、

「来ちゃったよ、敏夫」と刺々した女の声がした。おばさんだった。敏夫さんのお母さんの声だった。

「太一です。慶会楼の太一です」